

批判から解釈へ——翻訳における解釈の意味を考える——

水寄知子¹⁾, 江藤裕之¹⁾

【要 旨】 対象全体を把握してその良し悪しを見極めることが「批判」の本来の意味であるが、対象の価値を判断するためには、何らかの基準が必要である。批判されるものの真価を見極めるということは、批判するものに対してもそれにふさわしい厳しさと真摯さが求められる。それゆえ、「批判」に必要な基準は、既存の尺度や枠組みなどではなく、批判するもの自身の価値観にこそ見出されるべきであろう。そうであるならば、批判という営みには、批判するものの「解釈」が内在していると言えはしないか。本稿では、『源氏物語』の英語訳と、Carl Busseの詩 *Über den Bergen* の日本語訳を読み解きながら、原文の心が伝わる、読んで分かる翻訳に、訳者の解釈がこめられていることを論じ、書かれたものに新たな命を吹き込む「解釈」の意味を考えてみる。そして、書かれたものを本当に分かるためには、読み手の解釈がなければならないということを提示したい。

【キーワード】 批判, 解釈, 翻訳, 理解, 表現

学問の世界においても、日常の場においても、ものの良し悪しを的確に判断するためには批判的な態度が求められる。もっとも、この場合の「批判」とは、批判の対象を非難するような否定的な態度を言うのではなく、そのものの良い点・悪い点をどちらか一方に偏ることなく見極め、そのもの全体を理解し、価値を判断することを言う(水寄, 江藤, 2006)。

物事の良い点・悪い点を見極めるには何か基準となるものが必要となる。それには、ガイドラインやチェックリストといった他者による既存の枠組みを利用することもできよう。しかし、批判するものが批判されるものと対峙し、その真価を見極め、真によいものを選び抜く営みには、批判するものに対してもそれにふさわしい厳しさと真摯さが要求される。それゆえ、「よいものを選び抜く」のに必要な基準は、批判するものの価値観(人生観, 世界観, 学問観など)にこそ見出されるべきである。その結果、批判するものは自らの思考に対し自覚的になり、その思考は鍛えられ洗練されていく(水寄, 江藤, 2006)。

しからば、批判という営みには、そこにすでに批判するものの解釈が入っていることにはならないだろうか。そして、批判するものの解釈が入ることにより、批判されるものにはまた新たな命が吹き込まれ、それが、またひとつの新しい「作品」として次の批判者に伝えられていくのではないだろうか。著者は、かつて「批判の意味」を論じた際に、それを「書かれたものを書かれたものとして正しく読み解き、読み手である自分にとっての意味を判断する態度」と結論づけた(水寄, 江藤, 2006)。しかし、それは内容理解や価値判断の段階にとどまっており、理解しえたものを表現することの考察には至らなかった。

そこで、本稿では、「批判の意味」の続編として、批判するものの内なる「解釈」を経ることで、批判されるものが新しい命を与えられ次へと伝えられていくことを考えてみたい。つまり、あるもののインプットの段階である「批判」から進み、アウトプットを可能にする「解釈」の意味を考えてみる。そのひとつの具体例として翻訳という知的作業を取り上げ、人々の内面

¹⁾ 長野県看護大学
2006年10月10日受付

を経た「意味のコミュニケーション」の本質を考えてみる。

翻訳における解釈の意義

翻訳とは、簡単に言えば、あることばにより表現されたAという作品を、翻訳者を通して、別のことばによるBという作品に置き換える作業である。多くの場合、Aは外国語、あるいは古典語による作品であり、それを自国語、あるいは現代語へと移し替えていく。その場合、Aに書かれている内容を正確に把握することが前提となる。しかし、翻訳者がAの内容を十分に理解していたとしても、必ずしも翻訳Bが、Aの内容を正確に伝えるという保証はない。それは翻訳の技法が拙いということになるが、往々にして、字句に忠実に訳すという態度が翻訳された作品を分かりにくくしている理由だとする考えもある(外山, 2001a)。この点について、外山は次のように述べている。

[日本にすぐれた翻訳が少ないのは] 原文忠実主義のためである。なるべく原文に即して、そこから離れることのないように心がける。一語、一句もゆるがせにしないで移しかえようとする。厳密に言えばそれはほとんど不可能なことであるのに、[...]たとえ、訳文としてわけがわからなくとも、原文に忠実であるという免罪符があればひとまず安心できる。作者、著者に向かって翻訳してきたのが日本である。(2001a : pp.41-42, 下線部引用者)

たしかに、「原文に忠実」であっても、「訳文としてわけがわからない」翻訳であっては意味をなさない。では、原作者に向かって忠実な翻訳ではなく、読むものが分かる翻訳はどのようにすればよいのであろうか。外山は続ける。

これでは普通の意味での翻訳であるとはいえない。その名を冠するのにふさわしいのは、読むものに向かって少なくともわかる、できれば読みやすい新しい作品をつくるくらいの心構えが要求される。つまり、訳者の解釈、明快な解釈のない、ただ原文をなぞって自国語にするだけというのでは、新しい作品はおろか、読みものとしてもロクなこ

とにはならない。(2001a : p.42, 下線部引用者)

外山の主張によれば、読みやすい翻訳、読んで理解できる翻訳とは、原文から離れて新しい作品となるような翻訳のことを言う。それは、原文に忠実であるよりは、訳者の解釈を入れた作品こそが「読むものに向かって」の翻訳ということになる。

翻訳をする以上、訳者は、オリジナルのテキストを原文に忠実に正しく読み解き、あらゆる角度から全体を理解し、その意味を把握しているはずである。つまり、原文に対して「批判的な吟味」はなされていることになる。それでも、訳文が読むものにとって分かりづらいのは、表現の仕方に問題があるということになるが、その核心が「訳者の解釈が入ってない」ということであれば、この解釈はいかようにして可能になるのだろうか。

1. 源氏物語の英語訳から

外山は、訳者の解釈を入れることで翻訳がひとつの独立した作品となる成功例として、Arthur Waley (1889-1966) による源氏物語の英語訳を挙げている。紫式部の『源氏物語』は、その全編がWaleyにより初めて英訳され世界に紹介された。今日、『源氏物語』が世界文学としての地位を確立しているのは(小西, 2001)、このWaleyの英訳に負うところが大きい。このWaleyによる *The Tale of Genji* (1935) は諸外国のみならず、日本においても大いなる評価を得た。しかし、一部の国文学者は、オリジナルに忠実ではないという理由で、この英訳版を快く思わなかった。

[一部の国文学者たちは、源氏物語の] 英訳は、原作を歪め、それをそこなうものだと難じた。たとえば、『源氏物語』は歌物語といってもよいほど和歌が多く、重要なはたらきをしている。しかるに、ウェーリーの訳は、この和歌をことごとく落としてしまっている。これを翻訳ということができようかといった批判である。[...]ウェーリーは、和歌は翻訳不能と判断したのである。どんなに説明してみても西洋人にもみ込ませることはできない。それを入れれば作品全体の調和を破ってしまう。そういう信念に

もとづいてあえて省いたのである。考えようによっては、英訳は原作を下敷きにして、新しい作品を創り出すことに近かったのかもしれない。すくなくとも大規模な異本を創ろうとしていたことになる。そしてそれがりっぱに翻訳となるのである。(外山, 2001a : pp.42-43, 下線部引用者)

Waleyは『源氏物語』の原文をそのまま英語に移し替えるのではなく、自らの解釈を加え、新たな作品 *The Tale of Genji* にまで創りあげたことになる。そのことで『源氏物語』に新しい息吹が吹き込まれ、翻訳を超えてひとつの新しい作品として受け入れられた。

このWaleyの自由闊達な訳に対し、比較的原文に忠実な態度で源氏を英訳した最初の試みはEdward G. Seidensticker (b. 1921) によるものである。このSeidensticker訳について、Waley訳と対比しつつ、小西は次のように評している。

[ウェイリの翻訳は] 実に優雅な、品の高い英文でございまして、その品格の高いことはよくわかるのですけれども、今の英語国民[...]にとっても、そう取りつきやすい英語ではないのであります。英語で育った人間でも、そう簡単に読めるものではないということは、ちょっと文章に凝り過ぎたところもあるのではないかと思います。[...]サイデンステッカーさんの訳は、今のイギリス人、アメリカ人にもよくわかるような英語で書かれておまして、これなら皆さんが喜んで読んでくれたと思います。サイデンステッカーさんの訳は非常に正確でありまして、しかも読みやすい。(小西, 2001 : p.93, 下線部引用者)

読みやすいかどうかは別にして、Seidenstickerの *The Tale of Genji* はWaley訳よりも原文により忠実であるという評価は小西とともに外山も認めている。しかし、外山は訳者の解釈の薄いSeidensticker訳はWaley訳に及ばないと評している(外山, 2001a : p.45)。この点については小西も同意し、自由な翻訳で源氏の世界を巧みにとらえているが文献学的正確さに乏しいWaley訳と、原文に忠実に学術的にしっかりしているものの源氏の世界から離れているSeidensticker訳の違いを次のように述べている。

サイデンステッカーの訳はウェイリの訳よりも原文に近いんであります。原文になるべく近寄ろうとした。その点は非常によろしんで、しかも正確にわからせるのであります。『源氏物語』のもとの文章が持っている匂いといったようなものは、あまり伝わってまいりません。意味は非常に正確であります。原文の持っている匂いのようなものまでは十分ないんで、[...]。(小西, 2001 : pp.93-94)

では、実際にWaley訳とSeidensticker訳を比較し上記の主張を確かめてみたい。「若紫」の段から藤壺の宮が源氏との関係を思い悩む心を見事に描写した箇所を引用してみよう。

藤壺の宮、悩み給ふ事ありて、まかで給へり。うへの、おぼつかながら、嘆き聞え給ふ御気色も、いといとほしう、見たてまつりながら、「かかるをりだに」と、心もあくがれ惑ひて、いづくにもいづくにも、まうで給はず。内裏うちにても里にても、昼は、つくづくとながめ暮らして、暮るれば、王命婦を責めありき給ふ。いかが、たばかりけん、いとわりなくて、みたてまつる程さへ、うつつとは思えぬぞ、わびしきや。宮も、「あさましかりし」を、思し出づるだに、世と共の御物思ひなるを、「さてだにやみなん」と、ふかう思したるに、いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとて、うちとけず、心ふかう恥づかしげなる、御もてなしなどの、なほ、人に似させ給はぬを、「などか、なのめなることだに、うち交り給はざりけん」と、つらうさへぞ、思さる。何事をかは、きこえつくし給はん。暗部くらぶの山に、やどりも取らまほしげなれど、あやになる短夜みじかよにて、あさましう、なかなかなり。

見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎるわが身ともがな

と、むせ返り給ふさまも、さすがにいみじければ、

世がたりに人や伝へんたぐひなく憂き身をさめぬ夢になしても

おぼし乱れたるさまも、いと、ことわりに、かたじけなし。

(紫式部, 1965 : pp.191-192)

この箇所現代語訳を参考までに載せておく。

藤壺の宮が^{わづら}お患いなされて、お里へ^{さが}お下りになりました。お上が^も気をお揉み遊ばしていらっしやる御様子も、まことに^もおいたわしゅうお思いになるのですが、せめてこういう折にでもと、心も空にあくがれ^{まど}惑うて、どこへもここへもお出ましにならず^{うち}内裏でも御殿でも、昼はつくづくと物思いに^{ふけ}耽り給うて、日が暮れると^{おうみやうぶ}王命婦を追い廻しつつお責めになります。どのように計らったことなのか、たいそう無理な首尾をしてようようお逢いになるのですが、その間で^{うつつ}さえ現とは思えない苦しさです。宮も、浅ましかったいつぞやの^{しょうがい}ことをお思い出しになるだけでも、生涯のおん物思いの種なので、せめてはあれきりで^や止めましょうと、固く心におきめになっていらっしやいましたのに、またこのようになったことが^{なさけ}たいそう情なく、やるせなさそうな御様子をしていらっしやるのですが、やさしく愛らしく、といて打ち解けるでもなく、奥床しく恥かしそうにしていらっしやる^{たしな}おん嗜みなどの、やはり似るものもなくていらっしやいますのを、どうしてこうも欠点^なが^あおありにならないのであろうかと、君はかえって恨めしいまでにお思いになります。積るおん思いの^{かずかず}数々も、何として語り尽くせましようぞ。^{くらぶ}關部の山におん宿りも^{やど}なさりたそうなのですが、^{みじかよ}あいにくの短夜で、なまなかお逢いにならない方がましな^なくらい^なのでした。

見てもまた逢ふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎる我が身ともがな

(たまたまお目にかかりましても、再びお逢いする夜はなさそうぞございますゆえ、今夜の夢の中にこのまま私は消えてしまいとうございます)

と、^む涙に咽せ返り給う有様も、さすがにお可哀^なそうなので、世かたりに人やつたへんたぐいなく憂き身をさめぬ夢になしても

(あなたは夢と言われましたが、またとないほど辛い私の身を、たとい永久にさめない夢にするにしましても、後の世の語り草に人が伝えはしないでしょうか)

思い^{おそ}乱れていらっしやる御様子も、まことに^お道理で、畏れ多いのです。(谷崎、1991：pp.226-227)

この箇所の Waley と Seidensticker の訳は次のようになっている。

About this time Lady Fujitsubo fell ill and retired for a while from the Palace. The sight of the Emperor's grief and anxiety moved Genji's pity. But he could not help thinking that this was an opportunity which must not be missed. He spent the whole of that day in a state of great agitation, unable whether in his own house or at the Palace to think of anything else or call upon anyone. When at last the day was over, he succeeded in persuading her maid Omyobu to take a message. The girl, though she regarded any communication between them as most imprudent, seeing a strange look in his face like that of one who walks in a dream, took pity on him and went. The Princess looked back upon their former relationship as something wicked and horrible and the memory of it was a continual torment to her. She had determined that such a thing must never happen again.

She met him with a stern and sorrowful countenance, but this did not disguise her charm, and as though conscious that he was unduly admiring her she began to treat him with great coldness and disdain. He longed to find some blemish in her, to think that he had been mistaken, and [to] be at peace.

I need not tell all that happened. The night passed only too quickly. He whispered in her ear the poem: 'Now that at last we have met, would that we might vanish forever into the dream we dreamed tonight!' But she, still conscience-stricken: 'Though I were to hide in the darkness of eternal sleep, yet would my shame run through the world from tongue to tongue.' And indeed, as Genji knew, it was not without good cause that she had suddenly fallen into this fit of apprehension and remorse. (Waley, 1970 : pp.94-95)

Fujitsubo was ill and had gone home to her family. Genji managed a sympathetic thought or two for his lonely father, but his thoughts were chiefly on the possibility of seeing Fujitsubo. He quite halted his visits to other ladies. All through the day, at home and at court, he sat gazing off into space, and in the evening he would press Omyobu to be his intermediary. How she did it I do not know; but she contrived a meeting. It is sad to have to say that his earlier attentions, so unwelcome, no longer seemed real, and the mere thought that they had been successful was for Fujitsubo a torment. Determined that there would not be another meeting, she was shocked to find him in her presence again. She did not seek to hide her distress, and her efforts to turn him away delighted him even as they put him to shame. There was no one else quite like her. In that fact was his undoing: he would be less a prey to longing if he could find in her even a trace of the ordinary. And the tumult of thoughts and feelings that now assailed him—he would have liked to consign it to the Mountain of Obscurity. It might have been better, he sighed, so short was the night, if he had not come at all.

“So few and scattered the nights, so few the dreams.

Would that the dream tonight might take me with it.”

He was in tears, and she did, after all, have to feel sorry for him.

“Were I to disappear in the last of dreams

Would yet my name live on in infamy?”

She had every right to be unhappy, and he was sad for her. (Seidensticker, 1978 : pp.98-99)

WaleyとSeidenstickerの訳文を比較してみると、いくつかの共通項がある。それは、谷崎も指摘するように(1996)、以下の項目が考えられる。

- ・日本人が読んでも理解しがたい古典の原文を流暢

な読みやすい英語に訳している。

- ・英文の方が原文よりも精密であって、意味の不鮮明なところが少ない。原文の方は、言わないでも分かっていることはなるべく言わないままにしておくが、英文の方は、主語や目的語などを補い、前後から分かりきっていることでも分からせる工夫がある。
- ・英訳の方は意味ははっきりするが、それだけ意味が限られて浅いものになる。

そして、両者の相違点は、以下のような点が考えられる。

- ・Seidenstickerが歌を訳出しているのに対し、Waleyは原文の中に訳し込んでいる。
- ・Waleyの方が、Seidenstickerに比べリズムカルである。
- ・Seidenstickerは英語の大和言葉に相当するゲルマン系語以外にも、英語の外来語・古典語に相当する語を比較的多く用いている。

しかし、文体的にもっとも顕著な相違は、Seidenstickerが原文の流れに忠実に、文を単位にして一文一文丁寧に対応させて訳しているのに対し、Waleyはラフにパラグラフ単位で訳していることが感じられる。それゆえ、Seidensticker訳では、原文の箇所が英訳のどこに相当するのかを的確に示すことが比較的困難であることを指摘しておく。

たとえば、「いかが、たばかりけん、いとわりなくて、みたてまつる程さへ、うつつとは思えぬぞ、わびしきや(どのように計らったことなのか、たいそう無理な首尾をしてようようお逢いになるのですが、その間でさえ現とは思えない苦しきです)」の部分は、Seidenstickerは、How she did it I do not know; but she contrived a meeting. It is sad to have to say that his earlier attentions, so unwelcome, no longer seemed real, [...] と原文に近い形で訳しているが、WaleyはThe girl, though she regarded any communication between them as most imprudent, seeing a strange look in his face like that of one who walks in a dream, took pity on him and went. となっており、たしかに、原文からは

離れているものの、「うつつとは思えない」源氏の姿をむしろよく表していると言えよう。

また、Waleyの方が原文にはない語や文句を補っていることが多く、必然的にことば数が多くなっている。つまり、Seidenstickerは源氏の文章をそのままの「形」として伝えようとした側面が強く、それに対しWaleyは文章の並べ替えや、補足的説明をつけることで英語の読者に源氏の「心」を伝えようとしている。その意味で、Waley訳にはSeidenstickerよりもより訳者の解釈がこめられていると言える。

2. 詩歌の訳に見る解釈のあと

訳者の解釈という点につき、源氏の英訳に加え、ここでもうひとつの例を挙げよう。

山のあなたの空遠く
さいはい
 「幸」住むと人のいふ。
ああ
 噫、われひとと尋めゆきて、
 涙さしぐみ、かえりきぬ。
 山のあなたになほ遠く
さいはい
 「幸」住むと人のいふ。

これは、上田敏(1874-1916)による訳詩集『海潮音』(1905)に収められている訳詩「山のあなた」である。西洋の詩を平易で分かりやすく日本人に味わってもらうために書かれた『海潮音』の中でも、Paul Verlaine(1844-1896)の「落葉」と並び人気のある詩である。原作者である、ドイツ新ロマン派の詩人Carl Busse(1872-1918)はドイツ本国ではそれほど知られた存在ではなく、むしろ上田敏の訳のおかげで日本で有名になった。そのBusseの原詩Über den Bergen(あの山々の向こう)は次の通りである(引用者による直訳を併記する)。

Über den Bergen, weit zu wandern,
 sagen die Leute, wohnt das Glück.
 Ach, und ich ging im Schwarme der andern,
 kam mit verweinten Augen zurück.
 Über den Bergen, weit weit drüben,

sagen die Leute, wohnt das Glück.

歩くには遠いあの山々の向こうに、
 人々が言う、幸福が住んでいると。
 ああ、そして私は他の人々と群れになって行ったが、私は泣いた目で戻ってきた。
 遠く遠くかなたのあの山々の向こうに、
 人々が言う、幸福が住んでいると。

直訳と比べてみると一目瞭然であるが、七五調に訳された上田敏の日本語は美しい。そして、思わず口に出してしまうくらいリズムカルで、容易に誦んじることができる。原文がどんなに長くとも、各センテンスを七音節+五音節の七五調でまとめており、そのことで訳全体が引き締まっている。

Ach, und ich ging im Schwarme der andern,の部分、直訳すると「ああ、そして私は他の人々と群れになって行った」と冗長になるが、上田の手にかかると「噫、われひとと尋めゆきて」と簡にして妙を得た表現となる。ここで面白いのは、「尋めゆく」とは「たずね求めて行く」という意味の古語だが、このドイツ語の原文にはないことばである(原文は「他の人と一緒になって行った」となっている)。これは、「幸せをたずね求めて行く」ということであろう。つまり、上田は単にドイツ語の詩を字面だけ訳したのではなく、その解釈、つまり、その詩の心までも日本語に置き換えようとしたのである。

一行目のÜber den Bergen, weit zu wandern,も、直訳は「山々の向こうに、(その山々は)歩いて廻るには遠い」であるが、それが「山のあなたの空遠く」となる。「あなた」は「かなた(彼方)」ということだが、「あなた」には空間的な「向こう」のみならず、時間的にも「以前、前から」という意味がある。となると、「山のあなた」であって「山のかなた」としなかったのは、距離的な遠さだけではなく、時間的な遠さもそこにはあるという上田の解釈が込められたからである。ここでは、空間と時間が見事に交差している。

さらに、「空遠く」とあるが、原文には「空」はない。これも上田の解釈(創作)である。しかし、山のずっとずっと向こうに広がるのは空であり、それは、無限

の空間であり、無限の可能性であろう。山々の向こうの遠くの空の下には幸せがある。「あの山の向こう (ultramontan)」には光り輝く、我らを魅了するものがあるのだ。ブレンナー峠からイタリアを臨んだ Goethe のように、遠くを憧れ、現実の世界から逃避したいという芸術家の気持ちが迫ってくる。かくのごとく、原文の心を余すところなく汲み取り、それを七五調という限られた文字数の日本語で再現した「山のあなた」は見事な訳詩である。いや、訳詩というよりは、一個の新しい作品と見たほうがよいのかもしれない。

このような例は明治期の日本には少なからずある。「なじかは知らねど心わびて」ではじまる「ローレライ」などもその好例だろう。その特徴は、母語で表現された心情の世界を、ことばという形を超えて、別の母語の心の世界で表現しなおしたことである。これは、和歌、俳句、漢詩という日本の伝統に育ち、和語、漢語を駆使できた者が、西洋の学問に精通した場合にのみできたことである。西洋の言葉を多少かじっただけでは到底不可能である。翻訳という作業は、原文の言葉の知識は言うまでもなく、訳す言葉（たとえ、それが母国語であれ）への深い造詣が必要であり、読みやすく、また読んで理解できる翻訳には、必然的に訳者の解釈が介在してくるものなのである。

おわりに

外山は、対象の理解ということについて解釈の効用を次のように述べている。

人間はものごとを受け容れようとするれば、必然的に理解という加工、修正、変形を加えないわけにはいかない。言いかえると、人間は解釈によってのみものごとを理解すること、わがものとすることができる。あるがままをとり入れるのは理解ではない。解釈を経ないものは存在しない。われわれが読むものは、好むと好まざるとを問わず、いかなる場合も、われわれの解釈を受ける。その結果、理解されるものは、かならず、もとのものとは多少とも違ったものになる。(2001b : pp.143-144)

これは、受け取る側がいかに対象を客観的に理解す

ることができないかということ述べたものであるが、同時に、送る側が伝えようとするすべてのことを表現することはできないという点も暗示されている。つまり、伝えようとしても伝えられない部分を受け手が解釈によって補うことでコミュニケーションが成立するというのである。この点について、外山は次のように述べている。

表現は、目に見えない、うっかりしては意識されることもない多くの不確定な部分を多く内包している。これを確定的なものにすることによってはじめて表現は理解され、コミュニケーションが成立するのである。表現は書き手の創造性によって生まれるが、これが読まれ、公的に流通するには、受容者の二次的創造性ともいべきものの助けを藉りなくてはならない。(2001b : pp.145-146)

つまり、ある文章を、ただ分かった気になるのではなく、本当に分かるためには、その文章をあるがままに読み、書き手の意図を批判的に吟味するという過程において、読み手の解釈が不可欠となる。それは、書き手の意図から外れて、読み手が勝手な解釈を加えるということではない。上に挙げた『源氏物語』の Waley 訳や、Busse の上田訳のように、読み手の解釈を経ながら、原文が伝えようとする内容をより正確に再生産することが、実は原文そのものの深い理解につながるのである。「理解は作者と読者の協同によって成立するもの」(外山, 2001b : p.146)ということが認められてはじめて、「本当に分かる」という世界が実感できるのではないだろうか。そして、ひとつの作品は多くの人間の解釈という創造を経て生き続け、時代と空間を越えた意味をもつ古典となるのである。

本稿の筆者のひとり、著名なシェークスピア学者でもあり、また翻訳家としても有名な安西徹雄先生から、「翻訳をするときには、何となく雰囲気で訳してはいけませんが、その原文をとりまく雰囲気を訳出しなければならない」と直接お聞きしたことがある。翻訳に限らず、相手の言うことを本当に理解するためには、この「雰囲気」、つまり表現の空白部分を埋めなくてはならない。それが解釈である。ものの理解においては批判的分析が重要であることは言うまでもないが、こ

の解釈という知的作業なくしては、与えられたものを正確に理解することも、その内容を次に伝えることもできない。文字という「形」の伝達ではなく、「心」を伝えるという「意味のコミュニケーション」を考えらうえでは解釈を置き去りにすることはできない。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、アカデミア・プラトニカ・ティサネリアの勉強会で翻訳論について外山滋比古先生に直接ご教示いただいた。外山先生には、この場を借りて衷心より感謝申し上げたい。

文 献

- 小西甚一 (2001) : 世界文学としての源氏物語. 平成12年度実践女子大学・同短期大学公開市民講座「異文明との対話の新世紀 実践『源氏物語』研究フォーラム」. 91-99. 実践女子大学・同短期大学公開講座委員会.
- 水寄知子, 江藤裕之 (2006): 「批判」の意味——「論文クリティークとは何か」を考える一手段として. 長野県看護大学紀要, 8: 11-19.
- 紫式部 (1965 [c.1000]): 源氏物語. 岩波書店, 東京.
- Seidensticker, E. (1978 [1976]): *The Tale of Genji*. Tuttle, Boston.
- 谷崎潤一郎 (1991 [1964]): 潤一郎訳 源氏物語. 中央公論新社, 東京.
- 谷崎潤一郎 (1996 [1934]): 文章読本. 中央公論新社, 東京.
- 外山滋比古 (2001a): 翻訳. 外山滋比古. 古典論. 41-45. みすず書房, 東京.
- 外山滋比古 (2001b): 解釈. 外山滋比古. 古典論. 142-146. みすず書房, 東京.
- Waley, A. (1970 [1935]): *The Tale of Genji*. Tuttle, Boston.

【Summary】

From “Critique” to “Interpretation” : Translation as a Means of Communication of Meaning

Tomoko MIZUSAKI and Hiroyuki ETO ¹⁾

¹⁾ Nagano College of Nursing

The present paper tries to examine the function of readers' interpretation in understanding a given text and expressing in a literary form what is understood. Focusing on “interpretation in translation” as a means of communication of meaning, the authors compare 1) the original text (excerpt) of the *Tale of Genji* by Lady Murasaki and two contrastive English translations by Arthur Waley and Edward Seidensticker and 2) Carl Busse's poem “Über den Bergen” with its Japanese translation by Bin Ueda. From this task, it is concluded that the good translation, which conveys precise picture of the original to the readers, contains translators' interpretation of the original text, and that translation produces a new work by means of interpretation.

Key words: critique, interpretation, translation, understanding, expression

水寄知子 (みずさきともこ),
江藤裕之 (えとうひろゆき)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
0265-81-5159 (Fax 兼)
TOMOKO Mizusaki, Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
E-mail: mizusaki@nagano-nurs.ac.jp,
heto@nagano-nurs.ac.jp